「ケーキのゆくえ」

【あらすじ】

新倉こなつは専業主婦。夫である新倉秋良は仕事が忙しく、少し物足りない日々を過ごしていた。そんな中、こなつは秋良との初デートで行った喫茶店が閉店することを知る。秋良に初デートの時食べたケーキを覚えているか聞くが、秋良の反応は薄い。二人の思い出を覚えていなさそうな秋良にもやもやとするこなつだが、その時食べたケーキの種類を正しく覚えていたのは秋良の方だった。

驚くこなつに秋良は閉店前にもう一度喫茶店に行こうと誘うのであった。

【人物表】

新倉（旧姓・若宮）こなつ（３３）（２１）　主婦

新倉　秋良（３３）（２１）　こなつの夫

新倉　琴（６）　こなつと秋良の子

○喫茶店・店内（回想）

若宮こなつ（２１）・新倉秋良（２１）、窓際の席で向かい合って座り、メニューを見ている。

少し緊張している二人。

秋良「……」

こなつ「……」

秋良「……どれにしましょうか」

こなつ「どれにしましょうね」

二人が見ているメニューには沢山のケーキの写真。

秋良「（メニューをめくりながら）種類が多いのも困りものだね」

こなつ「うん……でも、それだけ分かれるってことだからその人のこと、よく知れそう」

秋良「王道とか、ミーハーとか？」

こなつ「ふふ、そう」

秋良「ケーキひとつで？」

こなつ「うん」

秋良「……」

秋良、メニューをこなつに向けて。
秋良「こなつさんは、どれを選ぶの」
こなつ、メニューを受け取り、少し悩んで。
こなつ「……私は――……」
○新倉家・琴の部屋（朝）
新倉琴（６）、タンスを漁っている。
新倉こなつ（３３）、部屋をのぞく。
こなつ「琴、靴下履けた？」
琴「ママ～うさちゃんの靴下ない」
こなつ「えー？　どこいったかな」
こなつ、部屋に入りベッドの下をのぞく。
秋良（３３）、部屋をのぞいて、
秋良「行ってくるよ」
こなつ、振り向き廊下に出て。
こなつ「あ、パパ、今日夕飯は？」
秋良「遅くなるから残しといてもらえる？」
こなつ「残業多い感じ？」

秋良「月末だからね、休日出勤もありそう」
こなつ「……そっか、お疲れ様。いってらっしゃい」
秋良「うん、行ってきます」
秋良、玄関に向かい外に出る。
こなつ「……」
こなつ、閉じたドアを見つめる。
こなつ「（琴の部屋の方を見て）琴、そろそろ諦めな」
こなつ、琴の部屋に向かう。

○商店街（昼）
こなつ、買い物をしている。
ふと曲がり角を見て、進路を変えて進む。

○喫茶店・前（昼）
こなつ、喫茶店の前で足を止める。
ドアには今月末で閉店することを知らせる紙が貼ってある。

こなつ「えっ……」

こなつ、張り紙を見つめる。

秋良、帰宅する。

○新倉家・玄関（夜）

秋良、リビングに入る。

○同・リビング

こなつ、寝室から出てくる。

秋良「あれ、まだ起きてたの」

こなつ「うん、おかえり」

秋良「琴は？　寝た？」

こなつ「とっくに」

こなつ、キッチンに向かい電子レンジのスイッチを押す。

こなつ「ねえ、喫茶店。覚えてる？」

秋良「？　喫茶店？」

こなつ「駅前の、よくデートで行ったとこ」

秋良「ああ、あそこか。うん」

こなつ「閉店しちゃうんだって」

秋良「え、そうなの」
こなつ「今月末までなんだって、残念だよね」
秋良、スーツを掛ける。
こなつ「ケーキたくさんあったよね、最初のデートでさ、私はうさぎの形したケーキ食べて、秋良君はチョコケーキだった」
秋良「そうだっけ」
こなつ「そうだよ」
秋良「そうだったっけ……？」
こなつ「そうだったよ……」
電子レンジの音が鳴る。
こなつ「……（何か言いたげな顔）」
こなつ、電子レンジからおかずを出してテーブルに置く。
秋良「ごめん、ありがと」
こなつ「ううん、おやすみ」
秋良「……おやすみ」
こなつ、寝室に入る。

○同・寝室

こなつ、ドアを閉めてため息。

○喫茶店・店内（回想）

窓際の席で向かい合って座るこなつ（２１）と秋良（２１）。

秋良、チョコケーキを一口食べ、こなつに向かって微笑む。

こなつ「秋良君はチョコケーキの人なんだね」

秋良「うん。こう見えて単純で王道だから。俺」

こなつ、笑う。

○喫茶店・前（夕）

幼稚園から帰宅途中のこなつ・琴、店の前で立ち止まる。

琴「ママ見て、うさちゃん」

琴、看板に貼ってあるうさぎ型ケーキの写真を指差す。

こなつ「ホントだ～かわいいね」

琴「ママうさちゃん好き？」

こなつ「うん、好きだよ」
こなつ、看板のメニューを眺める。
看板には沢山のケーキの写真。
こなつ「……（秋良の真似をして）種類が多いのも困りものだな」
こなつ、琴の手を握り直し、琴に向かって、
こなつ「琴、ケーキ、何食べたい？」

○マンション・エレベーター前（夕）
こなつ・琴、秋良と鉢合わせる。
秋良「あれ」
琴「！　パパ！」
琴、秋良に駆け寄る。
秋良、駆け寄ってきた琴を抱きしめ、
秋良「琴～ただいま」
と言い、反対の手でケーキの箱を掲げる。
秋良「これ、テイクアウトで買ってきた」
こなつ「……！」

こなつ、箱を受け取り、開く。
箱の中にはショートケーキとチョコレートケーキとうさぎ型ケーキ。
こなつ「え、待って、私も買ってきちゃった、同じケーキ」
秋良「え、ケーキ６個？」
こなつ・秋良、顔を見合わせる。

○新倉家・リビング（夜）
こなつ・秋良、夕食の準備をしている。
こなつ「今日は早く終わったんだね、仕事」
秋良「うん、全然終わってないけど。みんなでケーキ食べたくて切り上げてきた」
こなつ「（嬉しそうに）そっか…」
こなつ、ケーキの箱を開き、
こなつ「私ショートケーキでいい？」
秋良「いつもショートケーキじゃん」
こなつ「そだね」
秋良「こなつさんが最初のデートの時選んだのもショートケーキだったよ」

こなつ「え、嘘！」
秋良「ホント、覚えてる」
こなつ「この時はうさぎのケーキじゃなかった？　ミーハー魂で」
秋良「じゃないよ」
こなつ「そうだったっけ……」
秋良「そうだったそうだった、ほら食べよ」
秋良、皿を取りに行く。
秋良「ていうか自分のケーキは覚えてないのに俺がチョコレートケーキ選んだのは覚えてるんだ」
こなつ「（少し照れて）それは、まあ……」
こなつ、秋良から皿を受け取りショートケーキを乗せる。
秋良「ショートケーキだから好きになったんだよ」
こなつ「なにそれ」
秋良「こなつさんの好きなとこ」
こなつ「？」
秋良「今週の土曜。休日出勤無くしたからさ、

喫茶店、琴も連れて最後にもう一回行かない？」

こなつ「え……」

こなつ、驚くが、笑って、

こなつ「……うん」

○喫茶店・店内（回想）

窓際の席で向かい合って座っているこなつ（２１）と秋良（２１）。

秋良「こなつさんは、どれを選ぶの」

こなつ、秋良からメニューを受け取り。

こなつ「……私は、ショートケーキ」

秋良「え、こんなに種類あるのに？」

こなつ「だって、みんなが他のケーキに目移りしても私だけはいつも貴方が好きだよーって言ってあげたいから」

秋良「ケーキに？」

こなつ「そ、ケーキに」

こなつ・秋良、笑い合う。

〈了〉